あるむぜお78

府中市郷土の森博物館だより　al museo NO. 78　2006年12月20日

1972年(昭和47)撮影　ハケの道（白糸台）。アスファルト舗装でない道が続く。（写真No. 978-15b）

目次

1-2 宮本常一の見た府中 その7
ハケの道を歩く

3 展示会案内 特別展
遺跡の世界 2006 ・ テーマ展
縄文から弥生へ

4-5 ノート　江戸のなごりか
府中宿番場矢島キン家住宅の調査

6 収蔵庫のニューフェース

7 最近の発掘調査
埴輪が出てきたよ！ 遺跡発掘体験教室

8 展示室リニューアルトピックス ③

今から十年あまり前には自動車の通れない道も多かったし、通らない道もあった。それがあっという間に自動車の通らぬ道はなくなってしまった。よくよく歩くことがきらいになったようである。それでもまだ、あまり自動車の通らない道がほんの少しはのこっている。大国魂神社の東鳥居から東へ、台地の上をゆく道などがそれである。

宮本常一ほか 「府中さんぽ」
（『あるくみるきく』No.87　1974年）より

表紙：宮本常一の見た府中⑦　ハケの道を歩く

佐藤智敬

今回紹介する写真は、ひとつの道をたどり、それぞれの場所の風景を切り取る目的で撮影された写真です。

宮本常一の撮影した写真を連続で見ていくと、道の写真がよくあります。連載の最初で紹介した市中心部のケヤキ並木はもちろんのこと、自身が住んでいた新町界隈も多いように思います。ここで紹介する道は（宮本自身はその言葉をつかっていませんが）現在「いききの道」と呼ばれている、大國魂神社から調布まで続く、崖（ハケ）に沿って続く道です。宮本はこの道こそかつての甲州街道なのではないかと考えていたようです。それが交通の発達により広い現在の旧甲州街道に移り、その結果むかしの風情が残る道であったため興味を持ったのでしょう。彼の写真をじっくり見ると、何度かこの道をたどったことが窺えます。

表紙の写真は1972年2月撮影とされるもので、調布方面に向って見た道の風景です。撮影順に宮本の視点を追跡してみると、府中競馬場付近よりこの道を歩き、東郷寺（清水が丘）、本願寺（白糸台）、小田分（小柳町）へと移動し、沿道の気になった道、家、墓地、風景などを次々と撮影していったようです。

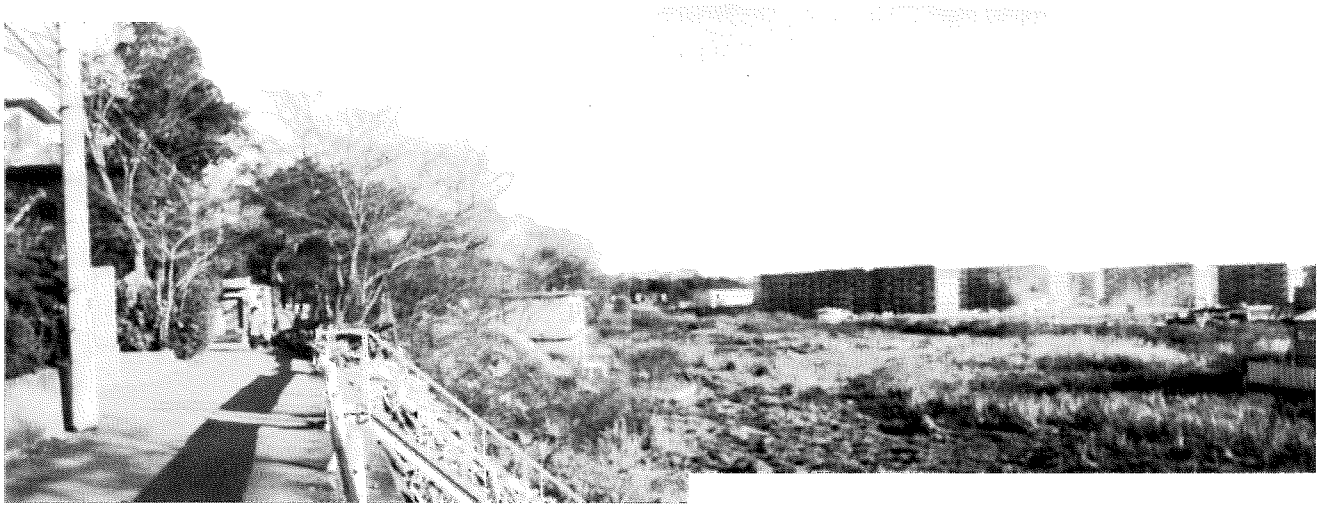
農地が減少し多くの建物が並ぶ2006年現在、この位置に立ってみても、広大な土地が右奥に広がっている風景など見ることはできません。また、各所で崖ぞいにフェンスがめぐらされたり、道沿いにも新しく家が建ち並んでいるところが多いようです。

下の写真は、その翌年撮影された、車返団地です。車返団地は1975年（昭和50）から入居がはじまりましたから、建設中の団地の風景を撮影したものです。うっすらと足場や重機のような影が見えませんか？

これらの写真からは、府中市が東西に走る段丘によってハケ上とハケ下に分かれていることがよくわかり、宅地化される以前のハケ下（画面右）を、ハケ上から広範囲にわたって眺めることができたことも見てとれます。ハケ下は水路も多く、田畑として利用されていましたが、1960年代からどんどん宅地化がすすみ、現在ではほとんどの場所が住宅となっています。団地に住んでいる方も、あるいはこの道沿いに住んでいる方も、こんな風景がかつてあったということをどれだけ覚えているでしょうか。

宮本には近代化の波の中で少しずつ変化していく風景、生活などを追跡する、という視点があったと思われます。そして、開発の中でいかに自然と人間が共存していくのか、という点にも関心を持っていました。自然が残る浅間山、東京農工大学、大國魂神社付近などを多く撮影していることでもそれは推察できます。

自然が多く残る道自体をたくさん写すこと。一見意味がないように思いますが、時がたつにつれて重要度を増してくることなのですね。



1973年（昭和48）11月撮影（写真№1111-29a,29b）　車返団地をのぞむパノラマ写真

特別展

遺跡の世界 2006

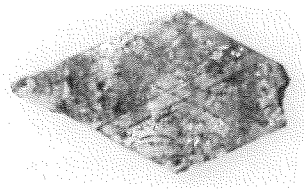
2007/2/10(土) - 3/25(日)

展示会案内

最新発掘速報 & 奈良・平安時代の武蔵台

今年度も、「遺跡の世界」展を開催します。

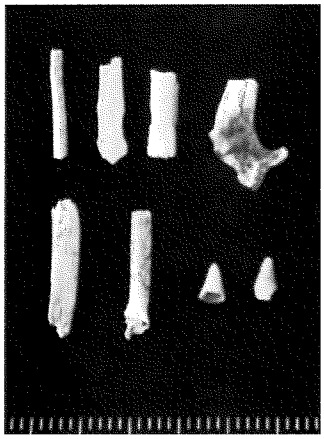
昨年度、市内で実施された発掘調査は、37か所。毎年のことながら、様々な時代の遺跡が姿をあらわしました。円筒埴輪をめぐらした古墳、中国・唐時代の青磁、金色に輝く古代の飾り金具、鎌倉時代の大國魂神社に使われた瓦、そして新発見の室町時代の屋敷群など。府中のおいたちを考えるうえで重要な遺跡の数々、見ごたえのある遺物も少なくありません。



金銅製の飾り金具
（白糸台4丁目出土）

見ごたえのある遺物は、展覧会場でも目に付きやすいと思いますので、ここでは目立たないけれども、興味深い出土品を紹介しておきましょう。

それは、平安時代、9世紀の竪穴建物跡のカマドから出土した、スズキやタイの骨です。1㎝に満たない骨の一部ですが、細かな調査と分析によって見つけ出されました。今日ではふつうに食卓にのぼりますが、古代の府中で、海魚を食べていたというのは、ちょっと驚きです。国府のマチならではの豊かな物流、そして豊かな食生活が想像できます。ぜひ、ルーペをのぞき込んでください。



タイ類の骨（宮町1丁目出土）
1目盛りは1mm

あわせて、市域北端にある武蔵台遺跡の調査成果を展示します。武蔵台遺跡は旧石器時代、縄文時代の遺跡として有名ですが、奈良・平安時代の遺跡としても重要で、武蔵国分寺の造営や維持に関係した集落と考えられています。今回は、この奈良・平安時代に的をしぼって、これまでの調査成果を総括します。これまた、奈良時代の暦の断片など、充実した遺物をご覧いただけると思います。

＊＊＊＊＊

多摩に稲作がやって来た!?

近年、府中では、縄文時代晩期の遺跡が大國魂神社裏遺跡で、弥生時代の遺跡が東京競馬場の構内に広がる日吉町遺跡で発見されました。府中では従来、縄文時代の終わりから弥生時代にかけての遺跡は全く知られていませんでしたから、まさに、歴史の空白を埋める発見でした。

とりわけ日吉町遺跡は、弥生時代前期の末にまでさかのぼることが判明しました。関東でも早い段階の弥生時代遺跡で、多摩地方での弥生時代の幕開けを告げる遺跡として注目されます。

今展示会では、これまで空白であった縄文から弥生への移り変わりを、府中市域および近隣の出土資料からたどってみようと思います。

テーマ展42

縄文から弥生へ

2006/12/2(土) - 2007/3/25(日)

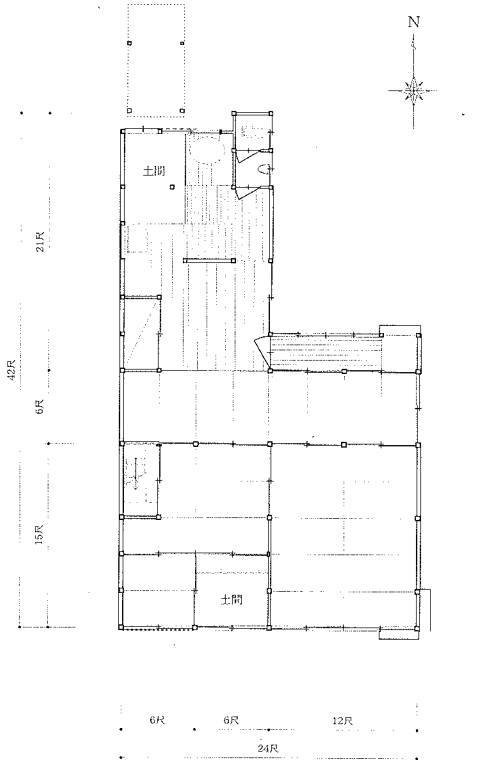
NOTE

江戸のなごりか
府中宿番場 矢島キン家住宅の調査

馬場治子

旧甲州街道に沿った江戸時代の府中宿も今ではビルが建ち並びすっかり近代的な町並みになってしまいました。それでも、府中街道との交差点にある高札場から西側はまだ道幅が狭い事もあり、何となくレトロな雰囲気が残っています。府中宿は本町・番場・新宿という3町で構成されていたことは良く知られていますが、ここは番場の町並みの中心をなす辺りです。

その中でも一際古い様子を保存していたのが、今回ご紹介する矢島キンさんのお宅です。宮西町4丁目、番場公園の東隣で、歩道に軒が差し掛かる家屋を記憶されている方も多くいらっしゃるでしょう。2006年春、取り壊しが決まったのを機会にお話を伺い、多少の調査をさせていただきました。



1階平面図

いつ頃の建物か？

建築的観察をお願いした文化財工学研究所の報告では、第一の注目は、建築当初の材に和釘が使われていたことです。和釘とは、鍛冶屋さんが1本ずつ打ち出したもので、頭が四角いのが特徴です。明治20年代に西洋の釘が輸入されるまで大いに使われた品ですが、その後は急速に無くなっていきました。これが見つかったということは、明治時代の初めには既にこの家が建てられていたという大きな証拠になります。

また、屋根裏と大差ない天井高と構造の2階部分は、辻子（厨子の字も）二階などと呼ばれる類のものです。当家の2軒隣には、郷土の森博物館に移築されている旧郵便取扱所（矢島九兵衛家）が在りました。ここは幕末から明治初年に建てられた家を、郵便取扱所用に大きく改造したと見られています。この建物と比べ、今回の2階や土間はより古い形と見受けられるので、建築年代は江戸時代まで遡れる可能性もあります。

“三郎兵衛”家

キンさんはこの町内で生まれ、結婚、子育てをして、昨年（2005年）元気に100歳を迎えられた

生粋の番場っ子です。ご夫君は30年以上前に亡くなられましたが、和服の仕立て屋さんの3代目でした。ですから通りに面した東側の座敷は、もっぱら裁縫の仕事場として使われていたそうです。キンさんの100年にも大変興味を引かれるのですが、今回はもう少し古い江戸時代の当家について考察してみたいと思います。

博物館で把握している明治初年の古文書や、天保6年(1835)の府中宿火事の報告書で、宿内の住人が列記されている「朱書 府中宿絵図」によると、この場所には三郎兵衛という人物が住んでいました。

また当家には、ある時点で過去の位牌を一つにまとめた繰り出し式の位牌があります。その中に、享保13年(1728)に亡くなった「蓮光妙心大姉」という女性がいますが、本町安養寺の過去帳には彼女の注記として「番場三郎兵衛祖母」とあります。これらを総合すると、当家の先祖は三郎兵衛を名乗っていたようです。

番場名主三郎兵衛

番場における“三郎兵衛”という名前は、全く別の史料からも拾う事ができます。

まず古いものでは、府中の江戸時代の基本土地台帳といえる延宝6年(1678)の「府中三町御検地水帳」です。検地帳とは、納税額算出のために、代官所が村々の土地を1筆ずつ等級・面積と耕作者を確定し、記述したものです。それには調査に当たった代官所の役人と共に、村側の代表も「案内人」として名前が並んでいます。こういう役に当たるのは、村のレーダー的な存在である名主か組頭です。

府中三町の案内人として本町10人、番場7人、新宿6人の名が挙がっていますが、番場に三郎兵衛が見えます。ただ、17冊ある三町の検地帳のうち、彼が顔を出しているのは6冊なので、この時点では番場で一番の責任者ではなさそうです。また、検地帳に記載されている彼の屋敷地は、確定は難しいながら、今回の場所ではなさそうです。

さて、その45年後、享保8年(1723)には、三郎兵衛が番場の名主役に就いた折の文書が残っています(矢島茂男家文書)。それまで弥市という人物が勤めていた名主役を忰の文次郎に継がせようと代官所に届けたところ、本人が幼少で名代が行うという形では許可できないとされ、ではその名代であり親類でもある三郎兵衛にさせて欲しいという内容です。

その文書通り享保年間には、武蔵野新田の番場割渡し分を戸倉新田村に売渡しているものなど「番場名主三郎兵衛」と署名されている史料が確認できます(国分寺市史料集Ⅱ)。

江戸時代、一つの村では異なる家で同じ名を名乗ることはまずありませんし、先の「蓮光妙心大姉」の位牌からもこの三郎兵衛は当家の先祖と考えて間違いないでしょう。

次郎左衛門・午之助との関係

ところが、三郎兵衛が村役人らしく登場する期間は短く20年足らずです。これに続く延享年間から幕末までの150年間に番場の名主として登場する名前は、次(治)郎左衛門か午之助に限られます。この間何代に亘っているのかはっきりしないのですが、二つの名前に親子関係があることは分っていますので、一軒の家で名主役が引き継がれたのは確かです。

この家は屋号を近江屋といい、姓は三郎兵衛家と同じ矢島氏です。そして、番場宿の問屋も兼ねており、明治初年の記録では間口が9.5間(17m強)程もあった旧地は、今回の矢島家住宅の地続きである番場公園の場所です。

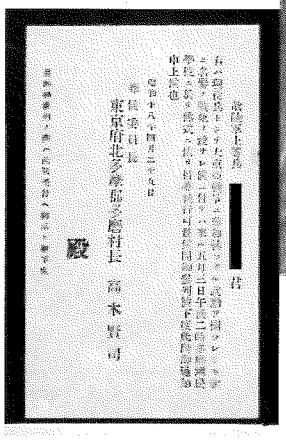
今のところ名主役を勤める前には、次郎左衛門・午之助の名が史料上見つけられない事、同じ矢島姓である事、屋敷が隣接している事などから、三郎兵衛家との間に親戚関係があるのではとも推測されますが、これを証明する史料にはまだ出会っていません。

三郎兵衛江戸へ

もう一つ、幕末に三郎兵衛の名のある史料を見つけました(矢島茂男家文書)。天保6年の大火にあった三郎兵衛は、嘉永元年(1848)には江戸神田旅籠町一丁目(外神田1丁目)で店を借りて時の物を扱う商売をしています。時の物とは、野菜か何か生鮮品でしょうか。彼は、番場の百姓株を、忰の鉄次郎(庄右衛門と改名)に相続させて、江戸へ出てきたのです。商いの成功具合は不明ですが、安政3年(1856)に江戸で生涯を終えました。

収蔵庫のニューフェース

出征兵士の幟
戦死者葬儀通知葉書
寄贈：小沢静男氏ほか



幟の撮影場所は、園内の旧府中尋常高等小学校々舎の２階
北多摩郡の徴兵検査はここで行われた

当博物館が、市民の協力をいただきながら収集している民俗資料のなかには、昭和の日中戦争・太平洋戦争に関わるものが少なくありません。今回は新たに寄贈された２件の資料を紹介します。

ひとつは、出征兵士を見送った際の幟です。日本では明治以来徴兵制が敷かれ、満 20 歳になると全員が徴兵検査を受けなければなりませんでした。健康上の問題がないと、順次３か年の兵役に就くことになります。戦争が始まると、召集令状（赤紙）を受け取ることは、戦場に向うことを意味していました。

いよいよ出征の日に、家族親類や村人たちが家に集まり、宴会をして、神社に参拝し、行列を作って駅まで見送るのが慣しでした。たくさんの幟に囲まれ、バンザイ・バンザイの叫び声のなか、当の若者が何とも言えない表情を浮かべている光景は、テレビドラマだけではなく、現実にどこでも繰り返されたものなのです。その時の幟、大小 53 点が市内分梅町の旧家の蔵に残されていました。いずれも「祝出征〇〇〇〇君」の文字と、幟を贈った個人名が書かれています。

もうひとつは、戦死者のための葬儀の通知葉書です。先の分梅町の青年は無事に帰還しましたが、戦場を駆け巡るわけですから生きて還れる保障はありません。是政出身のこの若者は陸軍上等兵として出征中の 1941 年（昭和 16)9 月、中国大陸において、わずか 20 歳の命を捧げています。遺骨は戻ってきたのかどうか。村葬は 1943 年 5 月 3 日に多磨国民学校（現・府中第四小学校）で行われたようです。

この頃、日本軍はガダルカナル島を撤退するなど戦局は極めて厳しくなっていました。「昭和十八年多磨村事務報告」によれば、この年に 57 名の村民が府中国民学校で徴兵検査を受けています。同じ年の「府中町事務報告」には、戦死者のための町葬が 6 回行われた記録があります。

あれから 60 年余。「平和憲法の精神から非核三原則を遵守し…」と謳った「府中市平和都市宣言」が出されてから 20 年目にあたる本年、市内では平和のためのさまざまな記念行事が行われました。

最近の発掘調査

埴輪が出てきたよ！ 遺跡発掘体験教室

西府町一丁目・本宿町一丁目　府中市教育委員会　西野善勝

親子発掘体験教室の様子

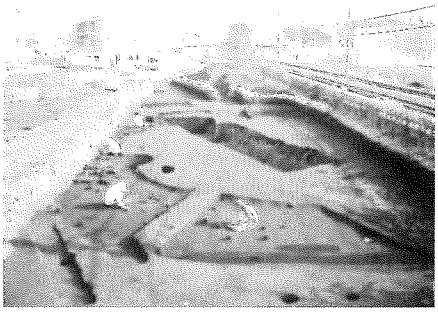
2008年秋、南武線に新しい駅が出来ます。新駅の予定地は、市立第五小学校と西府（にしふ）文化センターのすぐ北側にあたる場所ですが、この一帯は、本誌でもたびたび紹介してきたように、縄文時代の集落や中世の区画溝など、複数の時代の遺跡が重なって見つかっています。

新駅ができて駅の一帯が区画整理されると、周辺の風景は大きく変化することでしょう。新駅の着工前に、こうした遺跡の存在を多くの市民知っていただくとともに、生の歴史を体験していただきたくて、今回の発掘体験教室を計画しました。

体験教室を行った場所は、本誌75号で紹介した円筒埴輪（はにわ）が発見された地点です。教室は、夏と秋の2度実施しましたが、8月21日から31日にかけては、小中学生を中心に延べ30人が参加しました。夏休みも終わりに近づいた残暑の厳しい日々でしたのでので、参加者はTシャツに汗をにじませながらの発掘作業でした。

10月21日と22日には、「親子発掘体験教室」と銘打って募集したところ、19家族、47人が参加してくれました。ほとんどの方が、遺跡を掘るのは初めての体験で、皆さん真剣に取り組んでいました。保護者の方々は、考古学や遺跡に興味をもたれている方が多く、子供たちと一緒に、熱心に発掘されていました。その結果、埴輪の破片がたくさん出土しました。破片をみつけるたびに喜んでくださった姿が、とても印象的でした。これから接合・復元を行いますが、立派な埴輪をお見せすることができると思います。

短い時間でしたが、実際に道具を使って地面を掘り、本物の遺物を発見する体験をしたことで、手ごたえのある体験学習をしていただくことができたと思います。今回の発掘体験が、参加していただいた方々のよい思い出になるとともに、過去の様子に想像をめぐらし、ひいては、現在や未来について考えていただく材料となれば幸いです。



調査風景

埴輪は、周溝と呼ぶ円形に古墳を囲んでいる溝の中から出土しました。溝の内側には古墳の墳丘があったのですが、長い間に平になって溝だけが残ったものです。本来、墳丘の上に置かれていた埴輪が、溝の中に転がり落ちて埋まったものと見られます。

リニューアルトピックス

―展示室再生―

さらに市民に愛される
郷土の森博物館をめざして

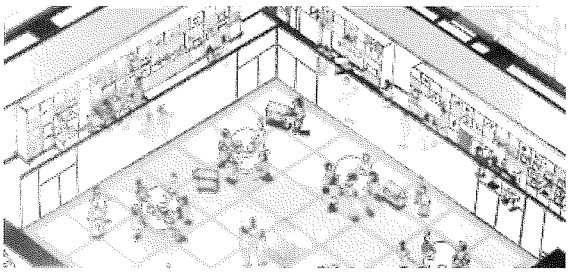
③ こどもに向けて

博物館には実に様々な方たちが、様々な目的を持って、あるいは目的を持たずにお見えになります。人それぞれではありますが、初めて博物館という所に行ってみるのは幾つ位なのでしょう。もし身近に「あらゆる人にとって使いやすく楽しめる展示」がしてあって、「わかりやすく楽しみながら学べる参加体験型展示」で「教育普及活動に対応できるように」なっている博物館があったら、きっと小さい時から常連さんになる子がふえることでしょう。

このページは、2007年度～2011年度の間に予定している常設展示室のリニューアル計画について、毎回ご紹介していますが、上に記した↗ことはその大きな柱です。

郷土の森博物館では、これまでも学校教育との連携をとる努力をしてきました。プラネタリウムで、映像の見易い傾斜型よりも、全天の星を学習するのにふさわしい平面ドームを採用しているのもその現われですし、園内やふるさと体験館での種々の催しも子供を念頭においているものが少なくありません。

常設展示室においても、展示解説を主として学校団体・個人をとわず子供たちに働きかけてきました。しかし「むずかしい…」「わからない…」その挙句(あげく)の「つまらない…」の壁を崩すことは容易ではありません。↙



こんな楽しそうな光景が
いつも見られますように

リニューアル計画の中で主として子供を対象に考えているのは、「子供歴史街道」と「体験ステーション」です。

展示室全体の構成も、基本は時系列にそって展開される予定ですが、コーナーごとになるそれとは別に、壁面を通しで用い、歴史の大きな流れを理解してもらおう、というのが「子供歴史街道」です。その中で、時代の核となる事柄を易しく説明されたり、ゲームをしたり、半分遊びながらも歴史に興味が持てるようなしかけを作ろうとしています。

「体験ステーション」は展示室の外側に設けられることになりますが、学校団体のガイダンスもできる空間として、また、ボランティアさんたちの手も借りて、展示にまつわるワークショップができる場所になるでしょう。

どちらの空間でも、まず子供たちが疑問を持つように、そしてそれを解決しようとする時に、先回りして答を差し出すのではなく、さりげなく方向を示す大人の手が伸べられたら最高です。「知るうれしさ」が「学ぶ楽しみ」に育つ、そんな博物館にしたいものです。

※あるむぜお　イタリア語で【博物館で】【博物館にて】の意

府中市郷土の森博物館だより〈あるむぜお〉No.78 発行日 2006/12/20
編集・発行（財）府中文化振興財団 府中市郷土の森博物館
〒183-0026 東京都府中市南町 6-32 TEL 042-368-7921
http：//www.fuchu-cpf.or.jp/museum/